6年間の牛歩（2002.4～2008.3）

舟 橋 明 男

感謝

九州産業大学には、64歳から70歳までの6年間、在職させていただいた。人生の高齢期であり、皆さんに助けられながら、定年まで、勤務させていただけたことに深く感謝している。

特に、単身赴任で、病気することもなく勤務できたのは、人間関係が大変よく、不愉快な思いを一度もしたことがなかった。それが一番うれしかった。

就任のいきさつ

教育職員の採用の仕方について、現在のシステムとは、異なっていたので、記しておきたい。

二男が、九産大芸術学部写真学科に入学して間もなく、修学懇談会の通知があった。会場は、高知県ではなく、隣の愛媛県松山市に出かけなければならなかった。そのことがきっかけとなって、翌年から高知県内でも開催していただけることになった。

九産大との交渉のやりとりが実にさわやかだった。高知支部長になり、学生生活の改善、大学祭への出店、県内就職先の開拓と実現、卒業生楠風会高知本部の結成、九産大イメージ形成の文化事業などを行った。最後には後援会本部の副会長に押され、当時は補助金カットなど混乱の中であったが、大学の再建計画に協力し、事故を契機に学生への保険加入制度、国鉄へ「九産大前」駅の新設要請、西鉄バスには九産大南口バス停への急行（?）停車などに取り組んだ。

二男が印画紙関係に就職をしてから、交通事故で死亡した。高校時代から撮りためてあったモノクロのネガと四つ切写真をもとに、卒論の指導いただいた石川先生と非常勤の平川先生が、信じられないようなご努力とお力でもって、ニコンサロンへの審査展示、全国6カ所での遺作展、そのうちの1回は九産大ロビーでも開催させていただいた。卒業生の推薦でコマーシャルベースによる写真集2冊が出版された。

このように九産大との関係を深めていたこともあって、古田福雄先生らが、おいでくださって面接、採用されることになった。センター独自で大学院を設置してほしいという要望であった。

大学院新研究科の設置

課せられた仕事は、大学院の新研究科の設置であったから、採用前から九産大に来て準備に取り掛かり、いくつかの案が作成された。

赴任後に、正式に検討が始まってしばらくして、国際文化の大学院で改組計画があり、教育系と臨床心理系にセンターとしても協力することになった。博士課程前期後期、学部が、一気に設置さ

れて、５年が過ぎるところで退職する歳を迎えた。来年からは村谷先生だけが担当される。後続と引き続き息の長い企画、計画、実現を期待したい。

九産大での教育と研究

実技を伴う科学演習は久しぶりだったので、新鮮な気持ちで取り込むことができた。実施したことを事例研究の形で論文化した（本センター紀要第６号　氷点下のスキー及びスノーボード実習で学習者は何を学習したのか。安河内先生と奥村先生との共同研究）。授業者がどのように考えて、それを実現するために内容と方法を立案して実施した。その報告を印刷物にすることによって批判批評を受けることが授業の質を高めるうえで大切だと考えたからである。

最近の若者には、社会変化への適応、個人自立状態が要求されることから、人と人とのコミュニケーション能力の低下が指摘され始めた。大学では特に、出口の就職の際に、自然なコミュニケーション能力の要求度が高いことから、それを高める方法をスポーツ科学演習で行った（本センター紀要第７号　授業評価において“就職に役立だたない授業科目”として低い評価を得た「スポーツ科学演習」における評価の変動）。対象となる新入学生の４月は、友達もまだいない状態である。集合しても、互いにある距離を置きながら、集まってくる。例えば、練習をする相手を「お願いします」と頭を下げて依頼することが、お互いにできない。その状態から、言葉と動作で依頼して、課題のスポーツのプレーを、お互いに持続して楽しみを見いだすしくみを、作り上げていった。

実技が伴う場合、多人数であり、広範囲な面積を使用することになるので、監視が行き届かず、ソフトとハードの面から事故防止が重要になる。ある年、サッカーの実技を含むスポーツ科学演習を担当したときに、ゴール転倒の事故発生を予見したので、理由書をつけて、ゴールの新規取り換え案を提出した。担当者は、素早く次年度には要求購入され、転倒予防のための固定ペグの打ち込みを習慣化することができた（本センター紀要第７号　サッカーゴール転倒予防における設置と保存の管理法）。

韓国の大学研究者との共同研究も、前任校から引き続いてすすめ、両国での学会発表や論文化に取り組んだ（本センター紀要第９号 BMI からみた韓国大学生の実態と理想体重）。現在は研究ばかりでなく、韓国の短大卒業生を、本学３年次に編入（本学の入学者のうち、２年生までに５％が中退している）を、検討し始めている。

大学は社会を変えていく。また、大学も、社会の変化に応じて変わっていく。５年後にどのような変化が予想されるのか、それに対応する準備は、いつからどのようにして進めていくのか、を明確にする時代を迎えている。

今後も時に古巣のセンターを訪れて、話を聞くことを楽しみにしている。